



今月の御聖訓



Handwritten calligraphy of the month's sermon, written in vertical columns from right to left.

さきざき申候しやうに、陰徳あれば陽報ありと申て、皆人は主にうたへ、主もいかんぞをほせしかどん、わたのの正直の心に主の後生をたすけたてまつらむとをもう心がうじやうにして、すれんをすすれば、かかるとしやうにもあづからせ給ぞかし。此は物のはしなり。大果報は又来(る)べしとをほしめせ

【陰徳陽報御書 全集一七七八頁】

目次

| | |
|------------------------|---------|
| 今月の御聖訓 | |
| 巻頭言 | 菅野憲道 1 |
| お講講話 南無妙法蓮華経より外の遊楽なきなり | 菅野憲道 2 |
| ちょっと寄り道⑧ (教室に通う) | 森田親道 9 |
| 「弟子分帳」と十七回忌〔二〕 | 松田銘道 10 |
| 天地つかの間〔その⑧〕 | 成田詳道 14 |
| 「佐渡紀行」 | 渡辺信朝 15 |
| 扉 (大客殿が取り壊される！) | 18 |
| 案内欄 | 19 |
| 恵日だより | 20 |
| 神無月詠草 恵日俳壇 | 20 |
| 10月の行事 今月の宅お講 | |

巻頭言

以常見我故 而生憍恣心

菅野 憲道



最近ようやくマスコミが創価学会による政治支配の危険に気づいて、総合雑誌などで警鐘をならすようになってきた。なるほど、各種の論文が主張するように、国民は新進党の衣を着た学会議員にだまされて、何の警戒もなく票を入れてしまうだろう。非学会の新進党議員にしても、小選挙区制において当落の鍵を握るのは、学会組織の回転いかんにかかっている。そうしてみると「新進党は創価学会党」というのもあながちオーバーとも思えない。何しろ、いまの議員は選挙で当選することがすべてで、どんな票でも喜んで食らいつくのであるから。

その上、国民の政治ばなれから起こる得票率の低下である。今までも国民の六、七割の投票率の中で、その三割程度の票を集めた自民党が長期政権を維持してきたし、その自民党は、そのまた三、四割くらいの議員集団である派閥（田中派とか経世会等）が支配し続けてきたのである。はたして国民の一割に満たない支持勢力であっても、結束して権力を維持してきたのであった。いま自民党の派閥政治が崩壊しはじめ、その間隙をぬって池田大作が創価学会のカリスマ支配を背景に、かつて田中角栄や金丸信の演じたキングメーカーたらんとしているのである。しかも、実現の可能性はかなり高くなってきている。

私どもは、正信覚醒運動の一環として、国会請願やデモまでやって、政治家やマスコミに「法華経を唱えるヒトラー」の危険を訴えてきたのであるが、彼らは結局のところ、取引に利用するだけであった。

現宗門にしても、宗門を乗っ取ろうとしている集団であることを何度も訴え続けたのであるが、宗門執行部は、苦心してやっとな封じ込めた池田大作を再び復活させた上、かえって我々の首と引き換えに多額の供養を受けてきたのであった。さらに、平成二年・本門寺改称問題について継命新聞にキャンペーンをはり、「日本の将来が危ない」と訴えたのであるが、今頃になってようやく気づいたのかと残念でならない。しかも未だに国民の大半はこうした危機が忍び寄っていることに気づかずにいる。

平成日本に妖怪が出現したら、その妖怪を生み出した日蓮正宗・阿部日顕師と今の政治家は永くその責を負わなければならぬのではないか。

お講講話(要旨)

拝読御書

「四条金吾殿御返事」(全集一四三頁)

南無妙法蓮華經より外の遊樂なきなり

菅野 憲道

《諸経に見られる極楽浄土》

本日は四条金吾殿御返事を通して「衆生所遊樂」について少々述べてみたいと思います。

人は真の幸せを願って信仰を始める場合が多いのですが、事実宗教の方でも、色々な至福への道が説き示されております。

その例が、浄土教に説かれる西方極楽浄土の世界であり、キリスト教の永遠の神の国等でありましょう。これらの宗教は現世から離れて理想の世界を求め、そこに幸せを見つけようとするものであります。

また、我々が朝晩読誦します寿量品自我偈の中にも、

「天人常充滿 園林諸堂閣 種種宝莊嚴 宝樹多華果 衆生所遊樂 諸天擊天鼓 常作衆伎樂 雨曼荼羅華 散仏及大衆」

とあります。そこに在る衆生は皆、何の不安もなく心の底から豊かで美しい世界に遊樂することが出来るとあって、まるで極楽浄土のような世界が描かれているのであります。

《大聖人様の説かれた「衆生所遊樂」》

ところが、日蓮大聖人や、それにつき従っていかれた弟子・檀越の人々の生涯は、「衆生所遊樂」どころか諸々の法難、迫害がふりかかって、波瀾万丈、大変苦難に満ちたものでありました。それも単なる経済的困苦だけではなく、生命的危機すら次々と襲ってきたわけでありまして、

平凡な人なら、少し悪口をいわれただけでも平静ではいられないわけですが、大聖人様は故なく法



辻説法の図「日蓮大聖人御一代絵図」

華経のために日本国中から憎まれ、魔呼ばわりされて、通りすがりに唾をかけられるは、石を投げつけられるは、夜打ち襲撃をされ家を焼かれる等のあらゆる迫害を受けられました。がしかし、それでもなお大聖人は、「衆生所遊樂」であると仰っておられるのであります。

また、檀越の四条金吾さんが、例の竜象房事件でもって主君から勘当を受け、自分の所領を全部没収されて、謹慎を命ぜられるという、現在でいえば会社を突然解雇されて職を失う以上の窮地に陥った時でも、大聖人様は四条さんに対して「衆生所遊樂」であるとお説きになっておられるのであります。

としますと、爾前経に説く極樂、いわゆる、

「いつでも妙なる音楽がどこからともなく流れてきて、気候は暑からず寒からず、あたり一面はいつでも草花が一杯生い茂っていて、衣食住何の不自由もない豊かで平穩な理想郷」と、法華経の行者の現実の姿では全く違わうわけです。しかも一方で、法華経にも、

「諸天昼夜常為法故而衛護之」「天諸童子為以給仕」

とあって、法華経の行者は必ず諸天善神によって護られることが説かれているのです。

そこで大聖人の弟子檀那の人々は、なぜ法華経を修行しても次々と法難が起こって、苦しまなければならぬのだろうと疑問を抱く人が大勢出たのです。人々は、「本当の平穩な幸せはどこにあるのだろう。お経には極樂や浄土が説かれるけれども、やはりそれはずうっと遠くの山の彼方にあるのだろうか。それとも死んだ後の未来世にあるのだろうか」等と疑念を抱いたに

違いありません。

それに対して大聖人様は、それらの考え方は爾前経であって、法華経以前の方便の教えである。どこか遠くにあると思っている地獄や極樂は、本当は我々のこの胸中にあるのだと言われたのであります。それは「上野殿後家尼御返事」等に、

「夫れ浄土と云うも地獄と云うも外には候はず。ただ我等がむね(胸)の間にあり」(全集一五〇四頁)

と説かれた通りであります。

法華経の成道観は、幸福も不幸も自身の外にあるものではない。自分のいのち、己心に一切の世界が可能性として内在しているのだから、自分のいのちが変わることによって、同時に自分の住む世界が浄土ともなり極樂ともなる、というものであります。このことを即身成仏とも、娑婆即寂光とも申すのであります。ただいまのわが身を離れずそのままで仏になることが出来る、娑婆という不安や苦しみに満ちた現実世界を離れずその身そのままの姿で寂光土と化することができるというものであります。

《一念三千の当体・いのちの可能性》

自己という存在は色心・依正ともに、一念三千の原理の上になり立っております。自分を自分たらしめているこの身体や意識と精神活動(正報)と、自己の依って立つ家族・社会や自然という依報を、我々は別個に存在するものと捉えがちですが、実際には渾然一体として法界をつらぬく因縁果報の道理の現れにほかならないのであります。

仏法は、一個の存在に法界の凝縮をみるのであります。一念三千といまして、刹那の一念に地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天・声聞・縁覚・菩薩・仏界に至るまでの、十の境界をそれぞれ互いに秘めているわけですが、そのいのちの様相が時々刻々に変化し続けているわけです。そして元品の無明という先天的な無明惑から我々の一念は善悪・真偽・美醜というものを顛倒して捉え、知らず知らずのうちに不安と混乱と疲労の方向に漂ってしまっているのです。例えば地獄のいのちで生きている人は、無自覚の内に地獄の中に落ちて苦しんでいるのでありまして、地獄の境界に入っても全く気づかないで、苦海を漂っている。御書には、

「地獄に処すること園觀に遊ぶが如し」

とありますが、地獄という自覚がないから、そこから逃れようという切実な願いがうまれてこない。そんなものだと思ったり、あきらめたりして、地獄の中でさえもわずかなことに喜びを見い出したりしておりますから、ますます間違った方へ突っ走ってしまいます。暴力団の構成員などの心理はこれに近いものがあるようです。暴力事件や覚醒剤等の犯罪行為を犯しても、むしろそれが誇らしげに語られる倒錯した世界に入ってしまうのであります。

今問題のオウム真理教の人達を見れば良く分かります。平凡な人間からすれば、最高教育を受けたエリートの人間が、何故に馬鹿げた、恐ろしく、虚しい、悪事を犯すのかと不思議ですが、当人達はそのことに気づかずに、むしろ喜びや楽しみ、生きがいになっただけです。

そういうわけですから、我々の日常も、実際には三毒のいのちの虜になって、地獄・餓鬼・畜生・修羅界に漂っていて、それが当たり前になって少しも気づかないことがおおいのです。己れのいのちを写す鏡があれば、時にはあまり醜く汚い状態になって、恥ずかしくて正視できないほどでしょうが、そんな鏡がないから平気でいられる。

「衆生所遊樂」を考えます時、本当の遊樂とはなんでありましょうか。一生悩みもなく、贅沢な衣食住が満ち溢れ、周りからちやほやされて、健康で長寿という状態が本当の幸福なのでしょう。もしそうであれば非常に退屈で、薄っぺらで、本当は滋味に乏しい貧しい人生ではないでしょうか。

我々の欲望は際限がなく、どこまでも快樂や虚栄を求めて、ついには欲が身を滅ぼしてしまうのです。眼前の楽しみばかり追い求めますと、餓鬼界や畜生界の命が強く出てきて、物欲・金銭欲に一生振り回されてしまうのです。それがお酒とか女色となりますと、お酒を飲むのではなく、お酒に溺れて身を滅ぼし、一生虚しく過ごしてしまう。こういった例は枚挙に暇がありません。元もとは自然に起こる自然の欲求が、適度に制御できず、欲が欲を呼んで妄想にまで発展し、翻弄され、やがて苦しみに変わるのであります。

楽しみであるはずが苦しみに変わっていく例は、いくらでもあります。これは凡夫の顛倒見、即ち逆さまに物事を見ているところから来る苦しみであります。

こうした食欲・瞋恚・愚癡のいのちをもっぱらにすれば、必ず地獄・餓鬼・畜生の道に入って、後には苦しみに満ちた虚し

い終末を迎えなければなりません。せめて我々は、まず人間らしい生き方をしなくてはならないと思います。

では、人間界の喜びや楽しみとはどういうことかといえますと、生きるということ、全面的に肯定できる境地でなくてはならないと思います。生きていることが楽しい——人間界に生を受けたことがありがたいことだと実感できないと、この喜びが理解できません。

《小説家・尾崎一雄の人生観》

尾崎一雄という作家が十数年前に喘息の悪化で亡くなりましたが、その人の作品に『美しい墓地からの眺め』という小説があります。自分の人生を死後の墓地から振り返るといふ設定のもので、その中に次のような一節があります。

「よく晴れた日の風も穏やかな午後一時・二時という時刻が、緒方（尾崎自身のこと）にとっては幸福の時ともいうべきものであった。そういう時は発作の起る恐れがない。大きな声を出しても胸に響かない。息切れもしない。だから自然と持前の大声になっている。緒方は寢床から抜け出し縁側に出る。煙草に火をつけ、うらうらとした陽ざしの中へゆっくりと煙を上げる。激しい勢いで若葉を吹き出している庭の木や草をしげしげと眺める。

『俺は、今生きて、ここにこうしている。』かういふ思いが、これ以上を求め得ぬ幸福感となって胸をしめつけるのだ。心につながるもの、目につながるもの、一切が、しめやかな、しかし絶ち難い愛惜の対象となるのもかういふ時だ。』

喘息のひどい発作で、死ぬほどの苦しみを味わっている人にとっては何でもない日々が至福の時なのだ表現しているのです。我々にとっては退屈で暇をもてあましたり、ぼんやりしたり……そんな当たり前の日常の時間が、自分の生をかみしめる充実感に満ちた一時だといふのです。

『俺は、今生きて、ここにこうしている。』という強烈な実感は、同時に生かされているという悦びでもあり、自分とともに生きる周囲の草木のいのちにまで共鳴する感慨であったようです。

恐らくそれは、日常世間の煩雑な関心事、仕事のこと、対人関係のこと、経済的な打算……、このような諸の幻想が、死に直面することによって、すべて色あせてしまったのではないでしょう。死刑執行を猶予されて、しばし娑婆に解放された死刑囚みたいに、生きているということが素晴らしいことだ心底感じとることが出来た、ということだと思います。

たとえば病気になるって入院したりすると健康の有り難さがよく分かります。しかしそれまでは健康の有り難さがなかなか分からないのであります。たいていの人が、健康を失ってみて、はじめて、お腹がすいてご飯が三度おいしく食べられる日々が、どんなにかけがえのない日々であったかが分かるのであります。

《人間界の「衆生所遊楽」》

人間らしい生き方とは、このように人間として生を受けた喜び・有り難さが、しっかりと人生観の根底に横たわっているところから出てくるのであります。食欲や性欲のみに振り回され

る人生なら犬や猫と変わらないのです。

人間に生まれたことの喜びが本当に分かったなら、たとえ苦しいことやつらいことがあっても、心のどこかで、このぐらいのことは人生という料理にスパイスを効かせるようなもので、こういうことが無かったら本当の人生が味わえないというほどに、おおらかな受けとめ方ができると思います。

一枚の絵が沢山の色で出来上がっているのと同じように、人生という絵もまた色とりどりの出来事で成り立っているということが分かった時に、全てのことが肯定出来る心境になるのではないのでしょうか。

これは「衆生所遊樂」から言えば、地獄界や餓鬼界から脱して、人間界の楽しみに気づいた人ということではないでしょうか。

また終戦記念日の時期がめぐってきますと、いつもながら戦争体験の悲惨さが語られます。また、皆さん方の中にも、九死に一生を得た経験をして、今日まで生きながらえた人も少なからずおられ、その方達からしみじみと「こうして命があつて、今に生きながらえております」と語られると、そんな時、やはりこの方達は、生きるということを実感しておられるのではないかと思います。

要するに、我々は、生きていくということに慣れっこになつてしまうと、その有り難さを忘れて、人間界に生を受けたという大きな宝を見失い、実に小さな宝に執著したり、つまらぬことにとらわれて悩み苦しむ、結局大きな宝を損なってしまうことが大變多いのであります。



龍口法難の図「日蓮大聖人御一代絵図」

「徒然草」の中に、次の一節があります。
「されば、人、死を憎まば、生を愛すべし。存命の喜び、日々に楽しまざらんや。」（第九十三段）

《三世の生命觀に立つ大聖人様の「衆生所有樂」》

しかし、法華經の信仰、大聖人様の仏法に入りますともう一段次元が深いのであります。

「生きている、そのことが自体が有り難い」だけでは、もし死んでしまえば、それでおしまいです。

大聖人様が竜口の法難を回顧されて、四条金吾さんにあてられたお手紙に、次のようなものがあります。

「今度法華經の行者として流罪死罪に及ぶ。流罪は伊東、死罪はたつのくち。相州のたつのくちこそ日蓮が命を捨てたる処なれ。仏土におとるべしや。其の故はすでに法華經の故なるがゆへなり。經に云く『十方仏土中唯有一乘法』と。此の意なるべきか。此の經文に一乘法と説き給うは法華經の事なり。十方仏土の中に

は法華経より外は全くなきなり。除仏方便説と見えたり。若し然らば、日蓮が難にあう所ごとに仏土なるべきか。娑婆世界のの中には日本国、日本国の中には相模の国、相模の国の中には片瀬、片瀬の中には竜口に、日蓮が命をとどめをく事は、法華経の御故なれば寂光土ともいべきか」

（「四条金吾殿御消息」全集一一一三頁）

竜口は、大聖人様が法華経の故に鎌倉幕府に弾圧されて、死罪にあつたところでありませぬ。竜口というのは刑場なのですが、その刑場こそが大聖人様にとっては極楽浄土・寂光土であるといわれているのです。そこには、人間界に生まれて有り難く思う以上の、徹底した大きな信仰の世界が開けているのではないかと思います。

この大聖人様のご境地を拝察しますと、法華経を持ち、三世の生命観に立脚して、真に生きることの意味を悟られた大聖人様の境地は、ただいたずらに朽ち果てる今生の命を、かりにも法華経の御為に捨てられるならば、瓦礫を黄金に換えるようなものであるから、むしろ無上の喜びだといふのであります。

大聖人は涅槃経をひいて、「命限り有り惜しむべからず。遂に願うべきは仏国なり」とも申されております。

法華経を信仰している仏法者としての生死観は、ただ過去と未来を絶ちきった現在だけの世界に生きていてのではないのです。今の中に既に三世を含んでいるのですから、現在は過去の集積でもあり、未来への出発点でもあるのです。今の自分が、たとえ余命幾ばくもない老年の病身であっても、かけがえのないいまの生を、未来に蘇生していく出発点と捉えるならば、そ

の中から己の使命を見つけ、己の生きがいを見つけて、未来に向かって少しでも功德善根を積んでいこうとする生き方に、変わってくるのではないのでしょうか。

いつでも今が出発点である、いつでも再生・創造の種を植えていく時であるという捉え方が、臨終の際まで出来るのではないのでしょうか。

《現時点は未来への再生の時》

御書の中に、

「妙とは蘇生の義なり」（「法華経題目抄」全集九四七頁）とあります。法華経を信ずることは、因果の理を信ずることです。因果の理を信ずることは、自分は死ねばそれでおしまいうことではないということです。

なるほど自分の肉体や意識はおしまいかもしれません。しかし、自分をあらしめたところの因縁は、必ず未来に連続して絶えることがありません。一滴の露が大海に帰るようなものでありましよう。法華経の御本尊を信ずる、ということとは、このように、本末究竟等の三世の因果を信ずるといふことでもありません。

では、今何をなすべきかとなれば、いつでも未来へ向けての種を植えていく時と信ずることです。それは常に蘇生・再生に向かつて生きていくことなのです。

我々は今の時点を絶えず流れる川のように単なる通過点のように思ってしまうがちですが、そうではなく、常に今にあるという自覚を本因と言うんだと思います。

自然界の草木の姿を見ておりますと、春夏秋冬いつでも未来に向かってダイナミックに新しい生命が再生されていくわけです。いつでも今が再生に向けての出発であり、すべてであると捉えてこそ、限りない未来への希望と光明を抱くことが出来るのです。

今生、人間界に生まれてきた喜びは、法華経の信心がなくてもある程度は理解できます。しかし我々は、人間として、更にもう一步奥に踏み込んで、法華経の信仰に生きて、大聖人を手本として、この生、この宝を徒らに朽ちさせることなく、さらに大きな宝へと再生を計っていつてこそ、無上の喜びを得るのであります。

正法を信ずることは、このいのちを正しい方向に最高に燃焼させて、更なる魂の生成発展に繋げていくことでもあります。こうした力は仏法にしか無いのであります。

大聖人様の生き方というものは、常に限りない蘇生の連続であります。「報恩抄」に、

「日蓮が慈悲広大ならば、南無妙法蓮華経は万年の外未来までもながるべし」(全集三二九頁)

と申されましたのも、人間日蓮の肉体や意識が絶えても、日蓮の衆生を済度せんとの慈悲のいのちは法界に遍満して永久に再生され、それが一切衆生の成仏を促していくのだという確信；、やがて日蓮の魂でもある南無妙法蓮華経に一切衆生のいのちが帰一同化して再生されるのだという大確信があったからこそ、あのように強靱な信念の行動がとれたのではないかと思えます。

生命には寿命が

ありますが、我々も正しい信仰・正しい信念に生き抜くならば、必ず我が一念は大聖人に

境地冥合して、生死を超越して妙法蓮華経の法界に遊樂することができるのであります。

また、こうした信念こそが、かえってわが生命をも死の瞬間まで充実させ続けるのではないでしようか。

大聖人様は、こ

を指して、
「一切衆生、南無妙法蓮華経と唱うるより外の遊樂なきなり」

と仰せなのでございます。合掌。

【神無月詠草】

〔橋本義一〕

戰場を 共に生き来て 六十年
友よ酌まんか 二十一世紀も
耳遠く 通話かなわぬ 戦友訪えば
彼の飲びに 暑さふつとぶ

〔橋本円子〕

半世紀の 哀歎を知る 桐葉^{たんす}筈
洗えば 若き日の艶かえる
冷やしたる 茶粥に添うる やたら漬
姑手作りの 味に及ばず



【惠日俳壇】

〔宮下留代〕

残暑きびし 法話聞く 身の汗^{あせ}牙^がゆ
残暑きびし 悲喜こもごもの 終戦日

〔野口毅 三度〕

おいしいね すいかの種が かくれんぼ



ちよつと寄り道⑧

一日の長めざして

伯耆の里 もりたかんどろ

あらためてS商会の社長から、パソコン教室の講師の依頼があったのは、昭和六十二年の九月のことだった。

何かのおり、S商会で社長と雑談しているうちに、パソコン教室の話になった。社長が「だれかこの教室の講師にいい人はいないでしょうか」という。あるいは私の以前のBASIC批判が効いたのか、BASICとは別に「一太郎」などのソフトの講習もしたいという。

私はパソコン通信のネット仲間の顔を順にひとりづつ思い浮かべた。たしかにパソコンができて、人に教えるだけの技量をもった人は何人かいる。だが、彼らはいずれも会社の中堅として働き盛り。多忙の身に新たに仕事を抱え込むほどの

ヒマ人はいない。「私の知ってる人は、みな忙しすぎてダメでしょうね」というしかなかった。

しばらく思案顔の社長は、いきなり、「森田さん、ひとつお願いできないでしょうか」と、矛先をこちらへ向けてきた。私がヒマ人の部類に入るのは、たしかだが、思わぬ展開に、とんでもない、冗談ではない、とあわてて断った。当然である。多少はパソコンに慣れ、いくらか

「一太郎」を使いこなせるようになったといっても、ただそれだけのことで、人に教えるレベルとは次元がおのずと違う。やはり本気なのだろうか、社長はなかなか引き下がらない。しばらく聞いてい

るうちに、内心、この便利なパソコンの魅力を多くの人に伝えたい気もしてきた。面白そうだなという気がしないでもない。徐々にだが次第に気持ち揺れていく。結局、ちよつと考えさせてください、と返事を保留する心境にまでなった。

その晩、ひとりで問題点を整理してみた。自分に教えるだけの見識や技量があるだろうか、パソコンやソフトの進歩についていけるだろうか。そんな疑問がわいてくる。その一方、もしやるとなれば、むしろいろいろなソフトの勉強がおのずからできるではないか。「一太郎」以外の、流行りの表計算ソフトや噂のデータベースソフトを実際にさわれるという誘惑は大きかった。そのうえS印刷の仕込みよろしきを与えて、ローマ字入力とカナ入力の方ができるというささやかな自信がある、自負がある。なに、受ける人の一日先を勉強していればいいんだ、それに困った時には教えてくれる仲間が何人もいるじゃないか。そこまで思い至ると、妙に気が楽になってきた。

翌朝、半年間お世話になったS印刷に辞意をつたえ、その足でS商会に受諾の返事をした。パソコンをはじめて一年半、インストラクターの道へ迷い込んだ。

「弟子分帳」と十七回忌〔二〕

松田 銘道

二、「弟子分帳」の構成

「弟子分帳」には、既に記したように御本尊を授与された六十五名の弟子檀越について記載されています。ちなみに、日優本には正本に記載されていない男性の檀越「由比甚五郎」氏が一名記載されていますから、この一名を加えると六十六名となります。

正本の六十五名のうち、十八名が出家者で、四十七名が檀越です。檀越では、男性が三十七名（このうち入道者十三名）、女性が十名（このうち後家尼八名、尼一名）です。

日興上人は、初めに二十八名の出家の弟子と俗の入道者について記載された後、次から小見出しを「俗弟子分」「女人弟子分」「在家人弟子分」とわざわざ付し、

それぞれ順に十三名（日優本的一名はここに追加されている）、七名、十七名と、四つに分類してリスト化されました。

日興上人は初めの二十八名について「弟子分」との小見出しを付され、また四つに区分された理由についても「その時代に准応せしもの」と（「弟子分帳解題」と述べられています）が、これについては当時の身分制度について新たに考察する必要があります。後に熱原法難関係について述べる時、この問題については少し触れたいと思いますので、「弟子分帳」の記載された内容とその特徴について、区分された順に述べてみます。

①「弟子分」の構成

まず、日興上人が「弟子分」と付された二十八名についてです。

ここには「弟子分帳」の第一の特徴としてあげることのできる「本弟子六人」（以下「本六」と表記）のことが記されています。日興上人は自らの弟子の中から「第一の弟子」と称された「日華、日目、日秀、日禪、日乗」を本六と定められました。

「本六」の選定といえば、もともとは大聖人が御入滅に先だつ十月八日に定め置かれたものです。いわゆる「日昭、日朗、日興、日向、日頂、日持」の六人の弟子方がそうです。すでに大聖人が定め置かれたその制度をなせ日興上人は新たに自らの弟子の構成によって設けられたのでしょうか。その理由を「弟子分帳」には次のように述べられています。

「故聖人の御弟子六人の中に五人は一同聖人の御姓名を改めて天台の弟子と

ちなみに、日持師については日道上人の「御伝土代」にも、

「日持蓮華阿闍梨は本とは興上御弟子六人に入らる、しかりといへとも師匠の興上にそむきかまくら方に同す」

(歴全一―二六八頁)

と、「弟子分帳」と同趣旨のことが記されています。ここには五老僧方を「鎌倉方」と称されていますので、住坊を破却されんとした法難が鎌倉を中心として起こったことが知れます。そして日持師なども鎌倉方の影響を受けてしまいました。さて、「本六」の選定の後には、日持師等十二人の弟子と波木井一族九名を含む十名の檀越について記されています。ここでは、波木井一族の中心者である

波木井実長氏の次の記述が注目されます。

「甲斐国南部六郎入道者、日興の第一の弟子也。仍て申し与ふる所件の如し」

(歴全一―九一頁)

南部六郎入道とは、波木井実長氏のことです。波木井氏については日興上人が正応元年(一二八八)十二月十六日に著された書状「原殿御返事」において、

一、安国論の正意を破る

二、久遠実成の如来の木像を破る

三、謗法の施が始めて行われた

との「謗法行為」を指摘され、このことが翌年の身延離山の直接の原因とされることから、なにかにつけ謗法者のレッテルが貼られ続けてきました。

このことは近年においてとくに顕著で、たとえば宗・創の問題にあってもしばしば波木井氏の謗法問題が取り上げられています。

学会にあっては池田氏が、

「現在、創価学会を『謗法の波木井』呼ばわりしている人がいるようである。

『いつも“菌切れ”が悪くなると“波木井”をもち出す』と言った人がいるが、この際『はっきり』その転倒を指摘しておきたい……学会が供養してき

たのは日蓮正宗だけである。七百年來、いな仏教史上、これ以上、正法に『供養』してきた在家はなかった。これは誇るのではなく、ありのままの事実である。正宗に供養することが謗法であるとは、総本山が謗法だと、自ら主張



身延山にある波木井実長の墓

しているのだろうか……」

(平成三年九月三十日)

と「謗法の波木井」と本山から批判されていることに不快感を示しています。

また、阿部師にあっては創価学会を破門した理由に波木井氏の謗法を持ち出してきました。

「波木井実長の外護があったればこそ、大聖人様が心安く御本懐を遂げられたとも考えられるわけでありますから、その功德たるや、末法万年にわたる正法興隆の礎を成しておるわけですから、実に計り知れないものがあるわけです。しかしながら、それほどの功德があっても、やはり大聖人様滅後において慢心を起こしたことによって、特に日向

という詭曲の僧侶の誑惑によって、仏法の本筋を違えて本末転倒の邪見を起し、日興上人に背いて大謗法の徒輩となってしまうわけです」

(平成三年十二月四日)

このように波木井氏の謗法行為を述べた後、日興上人の身延離山の振る舞いと学会を破門した宗門の行為は、ともに同じ立場に立つものであると理由づけています。しかし、宗・創の抗争は教義問題がその中心ではなく、阿部師と池田氏との間に生じた権威と権力の衝突であり、そうした諍あらしに波木井氏の謗法問題を取り上げ、自らの正当性を主張したり相手を批判したりしていますが、それはかえって日興上人のお心と教えに反する行為となりましょう。

というのも「弟子分帳」の記述にもう一度注目してみると、日興上人は波木井氏を「日興の第一の弟子也」と称されています。このことは、この時すでに波木井氏が死去（永仁五年九月二十五日、七十六才）しているということ。そして、たとえば日興上人の弟子の越後房や肥後

房、因幡房、筑前房。また日持師の弟子の太夫房や治部房等について、

「但し弘安年中に白蓮に背き了んぬ」

「但し今は背き了んぬ」

「但し聖人御滅後に背き了んぬ」

と「背き了んぬ」の語が記されていることと照らして考える時、大いに注目しなければならぬと思います。このことは「俗弟子分」「女人弟子分」の檀越四名についても同様に、

「但し聖人御滅後に背き了んぬ」

と「背き了んぬ」との語が記されていて、その人数は十二名にも及びます。

日興上人が弟子檀越の信仰の変遷について克明にその事実関係を記されている中で、波木井実長氏とその一族の誰一人にも「背き了んぬ」と記されていないことは、「原殿書」に記された謗法行為と波木井氏との関係、さらには身延を離山されるその前後のいきさつも含め一族との関係はどう展開していったのか、その事実関係を再度調べ直す必要があるようです。現在この問題については池田令道師が「富士門流の上代の諸問題」と題し

「聖道」誌に連載され、新たな見解を展開されています。その一部を要約して紹介させてもらえば、

- 一、(六月五日の波木井氏から日興上人への書状の年号推定を通して)日興上人と波木井氏との関係が完全な決裂をもって終ったとする従来の宗門史にも大いなる疑問を感じさせる。
- 二、波木井氏の行為を日興上人が許されることはないが、それはあくまでも民部日向師の教導によるものであり、波木井氏が直ちに日興上人の教えを反故にし違背したものとは少なからず違っていた。

等々、波木井氏との関係について、離山イコル 完全な決裂状態を意味しているとする従来の見解を見直し、日興上人が離山後も波木井氏の「改心」を永く期待されていたことを裏付けることができるとする説を、波木井氏等の書状を再検討して述べられています。このことは「弟子分帳」の「日興第一の弟子」との記述に照らし、大いに注目すべき見解であります。

(この項につづく 正覚院主管)

今年は地震の修復工事で毎日を土ボコリと清掃のうちに過ごしつつ、法隆寺修復で有名な西岡棟梁の訃報を聞いた。千年かけて成長した樹木は、材木となつてからも千年生きるもので、その使い方を間違えて木を殺すな、といった記事が印象的である。棟梁の使いたい木は、いまの日本では未成長だから、韓国までさがし

天地つかの間

〔その八〕

成田 詳道

に行くことであつた。

ところで青少年の育成を掲げる正信会だが、僧侶にも長期的かつ具体的な計画が求められる。現在、若手僧侶の法門研鑽の場としては、年に一度の講習会以外には、各寺院での自己勉強が手だてである。毎日の法務が大切なのは当然だが、基礎的な教学から富士の法門までを、一

末寺ですべて修得することは至難であろう。いわんや、住職や主管の要職にあつて、ご信者のお世話をしつつ、基礎教学を学ぶことは、不可能ですらある。

勝手な熱を吹かしてもらつたらば、私は興風談所のような存在を、少なくとも



「富士宗学要集」を編まれた日亨上人

北海道、関東、中部、四国、九州ぐらいの各教区に作れば良いと考える。寺院や布教所ではなく、志をもった青年僧侶が数人で、最低でも三年間程度、基礎教学を研鑽できる場を、田舎につくる。各談所がパソコンで連絡を取り合つて、年に一度は全体の研鑽を行うのである。

現在、興風談所にはかなり貴重な本や資料があるが、より多くの人が将来これを活用したり保管するためには、一カ所だけでは不安であり不便でもある。日亨上人は「富士宗学要集」の原稿を久留米の霧妙寺と、畑毛の隠居所と同じものに保管して効を奏したと聞く。実際、北海道から岡山まで、本を一冊みるために出かけるわけにもいくまい。

さらでだに、来年は日興上人の生誕七百年の記念の年に当たり、興風談所では、全国に散在する日興上人の御本尊を实地調査している。先日、関西近辺の調査には、私も同行させてもらったが、なにしろ地元不案内や、遠隔地ゆえの不利など、いくつか難題点に直面した。これなど、日頃から地元談所の人間が下調べしたり、後日の再調査などで、かなりのフォローができると思う。日目上人や日道上人の関係となれば、やがて奥州地域の調査も必要になる。だがこれらの作業は、寺院での法要の片手間にできる仕事ではないのである。（源立寺執事）

紀行

佐 渡 紀 行

渡 辺 信 朝



先日、佐渡へと行ってきた。佐渡へ行くのは三回目だが、今回はいまままでとはちがう思いで向った。当日、新潟県の直江津港からフェリーに乗った。船内は、

休息所・食堂・売店・ゲーム場などがあって至れり尽くせりである。おまけに、夏休み中だったので人が多く、まん中の広場では子供のためのイベントが行なわれていた。当初、それなりに大聖人様を偲んで感慨深く船に乗り込んだのであるが、一瞬の内にくずさった。仕方がないので、ひと気のない所へ行きしばし海を眺めた。二時間半後、フェリーは佐渡が島の小木港へ着いた。そこから、車で目的地へと向った。天気もよく、道路の横には海が広がっており、景色のよい島である。

現在、この島は観光地として栄えているが、昔は罪人が配流される島であった。

周知の通り大聖人様が流された島でもある。文永八年（一一二七）の九月十二日、大聖人様は幕府に捕らえられ、龍の口に引き出された。このことは、龍の口法難の三日後に書かれた「土木殿御返事」に、「此の十二日酉の時御勘気。武蔵守殿御あづかりにて、十三日丑の時にかまくらをいでて佐土の国へながされ候が、たうじはほんまのえちと申すところに、えちの六郎左衛門尉殿の代官右馬太郎と申す者あづかりて候が、いま四五日はあるべげに候」（全集九五〇一頁）とある。

「十二日の午後六時頃に幕府の咎めを受けた。武蔵守殿（北条宣時）の預かりとして、十三日の午前二時頃に鎌倉を出て佐渡の国へ流されることになった。今は依智（神奈川県厚木市）に住

する六郎左衛門尉（本間重連）の家来である右馬太郎という者に預けられている。もう四、五日はここに留めおかれるだろう。」

という意味である。このように大聖人様は、龍の口の斬首を脱れられ、佐渡流罪の身として依智の本間邸に送られたのである。

この時、大聖人様は、「このことは最初から覚悟していたことである。また法華経に説かれているように、たびたび咎めを受け罪障消滅してこそ仏になるのだから、自ら苦行の道を進むことは満足なことである。」と述べられる。このように、大聖人様は厳しい生活が予期される身でありながらも、法華経の色説を確証せられ、それを法悦とされるのである。

次に、翌十月三日に書かれた「五人土籠御書」に、「今月七日さどの国へまかるなり。」とある。これは「十月七日に佐渡へ発つことになった」ということであるから、前の御書では四、五日の間とされてはい

（全集一一二二頁）

たが、実際は一ヶ月ちかく本間邸に留められたようである。

ここでも大聖人様は、「我が身よりも牢中のことが思いやられる」として、あくまでも弟子の身を案じられるのである。さらに、この年の十月二十二日に書かれた「寺泊御書」に、

「今月（十月なり）十日相州愛宕郡依智の郷を起つて、武蔵の国久目河の宿に付き、十二日を経て、越後の国寺泊の津に付きぬ。此れより大海を亘つて、佐渡の国に至らんと欲す。順風定まらず、其の期を知らず」（全集九五頁）

とある。この御書によると、正確には十月十日に依智を出発して、武蔵国（埼玉県）の宿に付き、それから十二日を経て越後（新潟県）に着かれたのである。そして、これから佐渡に渡ろうとしているが、風が定まらないので佐渡に着くのは何時になるか分からないとされている。しかし、『富士年表』によると、

「十月二十八日佐渡に着く」とあるので、この御書を書かれた六日後に、佐渡に到着されたことになる。残念ながら航海中のことは詳しく記されたも

のがないので、その状況を正確に知ることは難しい。しかしながら、十月から四月までの間、新潟から佐渡へ渡ることはシベリアからの風によって大変難しいものであるらしい。したがって、厳しい状況の中を、しかも現代の船よりも粗末な船で佐渡に渡られたことは確かである。

このようなことを考えると、今は新潟から二時間半で車ごと佐渡に行くことができるので、つくづく便利な世の中だと思う。おまけに、名前は忘れてしまったが、もっと早い船が佐渡を行き来している。

今回、佐渡に行ったのは日興上人の御本尊を拝見させてもらえると聞いたからである。めったにない機会だったので、少々の無理を省みずに佐渡へわたった。そして、小木港から車で目的地に向かい、先発隊と合流した。

二泊三日の調査で合計二十体ちかくの御本尊を拝することが出来た。七百年の間、大事に受け継がれたものを拝することができるといのは大変有り難いものである。また、御真筆を目の当たりにすることによって、大聖人・日興上人にお

会ってきたようにさえ感じるものである。私は、冬の佐渡には行ったことがない。だから、いくら大聖人様を偲ぼうと思っても、到底無理なことであろう。大聖人様の佐渡での御生活は「国府尼御前御書」に、

「今度は佐渡の島なり。されば身命をつぐべきかつてもなし。形体を隠すベキ藤の衣ももたず。北海の島にはなたれしかば、彼の国の道俗は相州の男女よりもあだをなしき。野中に捨てられて雪にはだへをまじえ、くさをつみて命をささえたりき」（全集一三二四頁）

とある。満足に食料をとることができず、寒さの中で体を隠す衣すらない。さらに、島の人々に冷たい目で見られる。まさに、野中に捨てられて、雪をさえぎることさえできず、草を摘んで命を支えられたのである。このように大聖人様は、非常に過酷な生活を送られたのである。

四年の歳月の後、大聖人様は赦免される。大聖人様は、この数年の間に佐渡の人々との交流を育まれた。大変な生活を強いられたが、佐渡を後にする時、檀越の人々との別れを惜しまれている。先に

挙げた「国府尼御前御書」に、

「佐渡はつらい国ではあったが、いざ鎌倉に帰る時には、無いはずの髪が後ろへ引かれるようで、進む足も前には出ないほどであった。」

と述べられている。

こうした、大聖人様と佐渡の檀越の人々との信仰の交流は、この後も続く。身延の大聖人様を、再三にわたり佐渡の人々は訪ねた。大聖人様のためには、命をかけて海や山を何日もかけて往復したので

ある。はたして、何がそうさせるのであるのか。人間が必死になった時のエネルギーというものは凄いものである。

佐渡の人々が、初めて大聖人様を見た時の反応は、罪人として渡ってきたのであるから、そんなに良くはなかったであろう。しかしながら、大聖人様の強靱な精神力を目の当たりにし、佐渡の人々は感銘を受けたであろう。そして、いつしか大聖人様の訴えに耳を傾けるようになり、強い絆ができていったものと思われる。

佐渡 真野の海



大聖人様にとって、佐渡という所は大変な思いをされながらも、一生忘れられない場所であったと考えられる。もし、現代のように便利な乗り物があったら、また佐渡へ赴かれ、檀越の人々と再会を喜びあい昔話や信仰の話に花を咲かせられたであろう。

このようなことを考

えながらも、いいのか悪いのか、便利な世の中に自分は生まれあわせている。とにかく、普段ではなかなか叶わない貴重な御真筆を拜見できたのだから、今回の佐渡の調査は、自分にとっても忘れられないものになるであろう。

帰りも小木港からフェリーに乗った。行きと同じく波が穏やかで、心配していた船酔いもしなかった。そんなことよりも、また佐渡に来る機会があるのだろうかと思った。そんな折り、耳に残った言葉がある。ある方が、

「佐渡は、大聖人様の教えを布教するには良い場所です。」

と言われた。大聖人様が、ひたすら過酷な生活を送られたこの佐渡が、今となっては大聖人・日興上人の曼荼羅等が多く残されており、多くのことを学ぶことができる。まさに弘教に適した場所である。

我々の生活の中で、苦しくて逃げ出してしまいたいことがあったとしても、大聖人様のようにかたくなに正法を持ってどっしりとしていれば、どのような所も寂光土と見えてくるのではないだろうか。

(興風談所)



大客殿が取り壊される！

Handwritten signature and text, likely a note or endorsement related to the article.

大石寺の大客殿が耐震診断の結果、地震に弱い構造だったとして、なんと取り壊して建て替えることになりました。

これは宗門の重要問題であるにもかかわらず、宗会にはかることもなく、大石寺の事業として行なうということ、宗門の人々が全く関知しない独断かつ突然の発表だったようです。

『大日蓮』九月号によると、八月の教師講習会において八木主任が「総本山諸堂宇の地震対策ならびに大客殿の問題について」と題して、はじめて公表したようですが、それによると、現在のままでは屋根が一万吨以上あって、予想される東海大地震に耐えることができないとのこと。また補修も莫大な金がかかりすぎるので現実的ではないということのよ

うです。この発表では、

「常にご本尊様ならびに御法主上人嚴護の念を持ち、参詣信徒の身を案じて安全性に最大の心を砕き、そのための措置を講ずるのは、けだし当然の理であります」

等と、ウムをいわせない発表で、しかも設計図まで用意されていたようです。

現在の大客殿は、世界の銘材を集めて作られた建物ですが、それらが地震もこないうちに瓦礫と化してしまふことになったのです。

ところが、これら本山側の発表に対して、今回大客殿の耐震診断を担当した大客殿設計者の横山公男氏（常在寺総代）・大客殿構造設計者の青木繁氏が連名で、平成七年九月十二日、書面を送付して

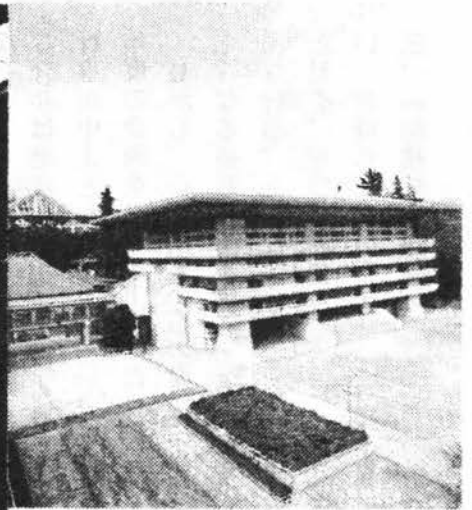
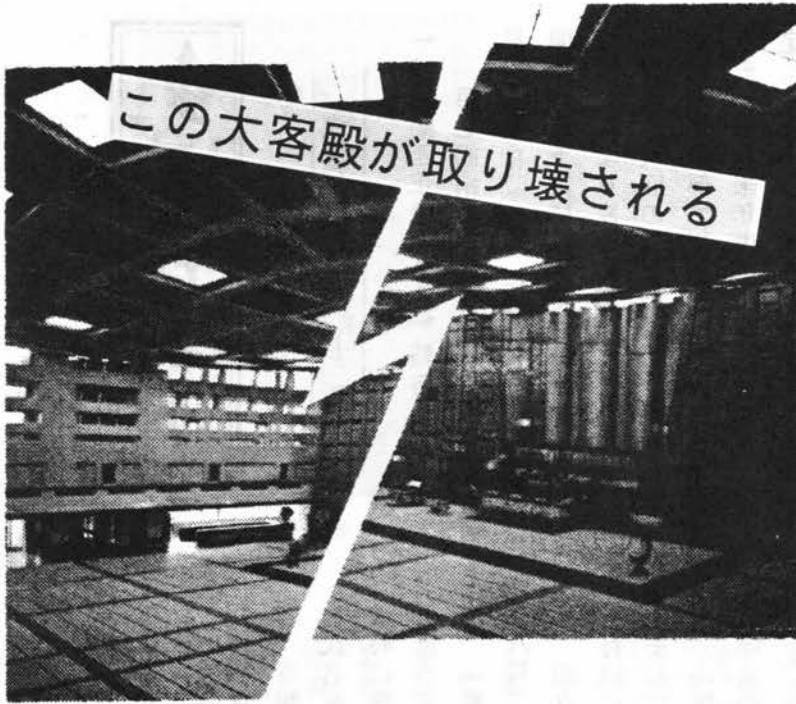
「理由なき取り壊し」の撤回を要望しています。その書面は、

「去る八月二十三日大客殿解体の方針が発表されましたが、その中で解体の理由として挙げているのは、私達の耐震診断およびその報告書の著しい歪曲に基づくもので、当事者としてこれを看過することはできません。」

と、書き始められ、以下、建物の耐震診断の結果をふまえて提示した対策案は、なんと三千万円で十分な補修が可能ないと、解体費用だけで五億円もかかるというものでした。

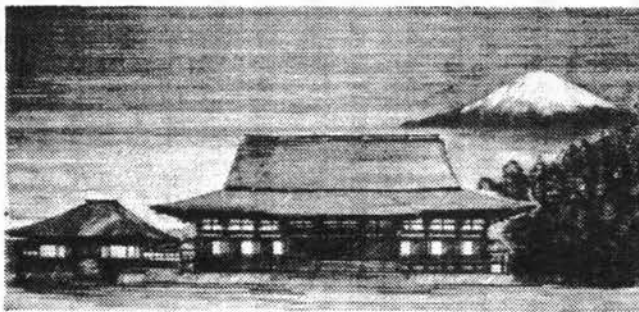
その経緯を表にして述べた後、大客殿のように公的な建造物が恣意的に「事実の歪曲の上に捏造された理由によって解体されるのを私達は座視してはならない。」耐用年数がまだまだある建物をウソをついてまで取り壊すという本当の理由は何かとして、大客殿解体の強行を中止を求めた抗議文となっています。

心血を注いで建築に当たった設計者としては当然の心情ではないでしょうか。



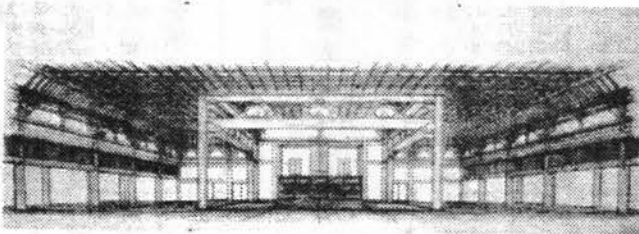
現在の客殿

しかしながら、これらの抗議も無視され、すでに大客殿は解体作業の足場で囲われたようです。
 はたして阿部師の大客殿解体の本当の理由は何でしょうか。口さがない現宗門僧侶の解説では、「題目塔や広布坊で相



新客殿の完成予想画

当儲かったのではないか。味をしめてまた金集めの大家名分にしようとしているんだらう」とのこと。ああそれにしてもあの客殿を解体するとは?!
 宗門には法主の唯我独尊の弊害がいよいよ浸透しているようです。



新客殿の内部



幹事会

一、『関西正信連合会』報告

「第七回南近畿法華講大会」を、十一月二十六日（日）に源立寺新本堂にて、開催する予定になっておりますが、工事の都合により変更の場合もあります。詳細は次回の幹事会にて。（山本）

二、『企画部』報告

そろそろ来年度の「年間行事予定」の企画に取りかかっております。今年度は地震の修復工事により、大半の行事が中止となりましたので、来年は今年度の企画をスライドさせたく思います。しかし、みなさまからの要望によって、さらなる斬新企画を願っております。こんな行事、あんな研修と、みなさまのご意見を、ぜひ企画部まで、ご一報ください。お待ちしております。（榎本真弓）

三、『総務部』報告

ご住職より、寺報『恵日』の贈呈発送を受付して下さるお話がありました。お嫁に行った娘さん、単身で遠隔地に勤める息子さん、学会時代の知人などなど、寺報を読ませてあげたい方の、住所・氏名をお知らせくだされば、毎月の発送時に無料で贈呈発送していただけます。どうぞご活用下さい。（橋本）

四、『青年部』報告

八月二十六、二十七日の夏期研修会には、源立寺から七名の参加があり、青年の育成につきおおいに感慨を新たにしました。（太田英治）

五、『記録係』報告

年表の出版案内

『年表 正信覚醒運動の歩み』

（日蓮正宗の戦後五十年と激動の現代）

継命新聞社刊 A4判 千頁

定価二万円 （佐久間）

会計よりお願い

十月は、講費納入の自動振替の月にあたっております。

講員各位には、よろしく願います。

（太田）

祝 結 婚

九月十四日、服部地区の遠藤茂さんと、橋本裕美さんのご両人が、源立寺本堂にて、結婚式を挙げられました。

五条妙観院

本堂落慶法要のご案内

源立寺の執事をされていた山崎潤道師が、このほど新本堂を建立されました。

法要は十月十日の午前十一時から奉修されます。教区ではお会式の最中ですが、各講中から代表者が集って祝福することになりました。源立寺からは二十名の方が参詣できますが、日程が差し迫っているうえ、定員が少数です。

- ・ 輸送 〓 自家用車五台
- ・ 出発 〓 午前八時半 源立寺発

★案内欄★

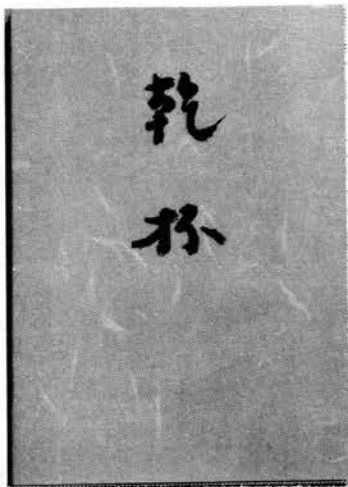
講中の皆さんの中で、趣味や特技をかされて活躍されている方が、たくさんいらっしゃいますが、その方々の中で、本を出版された方いらっしゃいますので、誌上にてご紹介します。

一、『歌集 乾杯』

発行 平成四年八月

著者 橋本 義一・円子（高槻地区）

非売品



橋本義一・円子共著 歌集『乾杯』

橋本さんご夫婦が、金婚式を記念して、出版された歌集。全三八〇首の作品集に、息子さん方もご夫婦との思い出を綴って寄せられています。



奥 はつ著 歌集『溪流』

二、『歌集 溪流』

あめつち叢書七二輯

発行 一九九四年九月十日

著者 奥 はつ（槻木地区）

定価 三〇〇〇円

現在八十九歳の奥さん。短歌に地域活動にと、現役バリバリで取り組んでおられます。奥さんにとっては二冊目の歌集。

三、絵本『ケン太の歌声いつまでも』

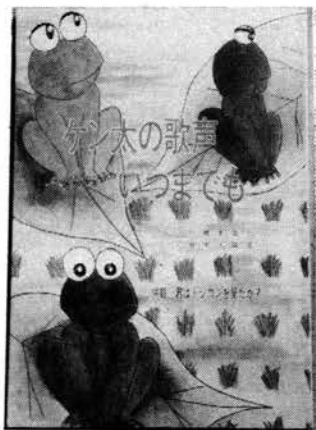
発行 一九九五年八月二十日

作 橋本 良介（高槻地区）

絵 木下 陽菜^{ひな}

定価 一〇〇〇円

良介さんは、橋本副講頭の四男。木下陽菜ちゃん（小学六年生）のすてきな絵との出会いが、一冊の絵本になりました。



橋本良介作

絵本『ケン太の歌声いつまでも』





十月の行事



一日(日) 午前八時 講中勤行会・幹事会

午後二時 お経日(講話)

七日(土) 午後二時 広基寺お講

八日(日) 午後一時 お講・役員会

十日(火) 午前十一時

五条 妙観院新本堂落慶式

十三日(金) 午後一時 お講

二十一日(土) 午後二時 教学研鑽会

※今月は教区お会式のため「法華経講義」はありません
壮年部の興風談所「一泊研修会」も中止となりました

今月の宅お講

六日(金) 午後一時半 川西地区(覚元ミカ宅)

十二日(木) 午後一時半 槻木地区(勝弘義一宅)

十八日(水) 午後二時 大阪地区(梅本光二郎宅)

二十日(金) 午後一時半 服部地区(芝野ハル工宅)

二十八日(土) 午後一時半 宝塚地区(蕨野真智子宅)

※宅お講の申し込みは、源立寺までお願いします。
締め切りは、毎月二十日です。

恵日 平成七年十月号 通巻八号
平成七年十月一日発行

編集兼 菅野憲道
発行人 恵日編集室

〒五六三 池田市槻木町一―一〇 源立寺内
購読料 定価一〇〇円(千別)